一八八七年二月二十一日（月）

バラナゴル僧院（マト）

ナレンドラ、ラカール他、僧院（マト）の兄弟たちの〝シヴァ・ラートリーの誓い〟

バラナゴルの家――ナレンドラ、ラカールたちは、シヴァ・ラートリー（訳註1）の断食を行っている。二日あとにはタクールの誕生日（この月の自分二日）のおまつりがとり行われることになっている。

バラナゴルの家に彼らが住むようになってから五ヶ月あまりが経った。タクール、聖ラーマクリシュナが永遠の住処に移られてから、まださほどの月日が流れていなかった。ナレンドラ、ラカールをはじめとする信者たちは強い離欲の気持ちに満たされている。或る日、ラカールの父親がここに来て、ラカールに向かって家に戻ってくれるようにと説得した。その時ラカールはこう言ったものだ――「どうして、わざわざここまでいらっしゃるのですか！　私は此処で幸福に暮らしているのでよ。今後はあなた方が私を忘れ、私もあなた方を忘れることができるよう、祝福して下さい」――このように皆、強い離欲の気持ちに満たされて、終日（ひねもす）、修行に時を過ごしていたのである。目的は一つ――何とかして至聖（かみ）に会いたい。

皆は称名をしたり、瞑想したり、時には経典を読誦したりする。ナレンドラは言うのだ――「ギーターのなかで至聖は、無欲無私の行いをせよ、とおっしゃっている。それは、祈りや、称名や、瞑想をすることだ。世間の用事ではない」

今日、ナレンドラは朝早くからカルカッタへ出かけた。家族が巻き込まれている訴訟問題の用事をするためである。法廷で証言をするのだろう。

校長は午前九時ころ僧院に着いた。居間に入っていったら彼を見たターラクは喜んで、シヴァの歌をうたい出した――

タティヤ　タティヤ　夢中で踊る――

ラカールも彼の歌に加わった。そして歌いながら、二人とも踊っている――。この歌はナレンドラ

（訳註1）シヴァ・ラートリー――ラートリーは夜の意で、シヴァ・ラートリーは〝シヴァの夜〟または〝吉兆の夜〟という意味で、新月の前の日（満月から14日目）を指す。ファルグン月（2月中旬～3月中旬）は特にマハー・シヴァ・ラートリーとも言われ一年で最も神聖な日とされる。シヴァ・ラートリーは月が新月に移行する境目であり、このとき欲望が消滅し（月が痩せていくことは欲望が消滅していくこと）、次に満月へと向かうときに解脱への原動力が増大すると信じられているので、この夜に断食をして寝ずに瞑想や讃歌をうたうなどの霊性修行に励むことは大きな功徳があるとされている。

が最近つくったものである。

タティヤ　タティヤ　夢中で踊る
ボボボン　ボボボン　頬(ほお)たたき
太鼓(ダマル)ならして　ディム　ディム　ディム
頭蓋骨の首飾りをぶらぶらさせて――
三叉(みつまた)の鉾(ほこ)先は火を吐き光る
ドク、ドク、ドク、頂きのたぶさを
月は照らして輝きわたる

ダマル――シヴァ神の持つ太鼓でデンデン太鼓のように振って鳴らす
三叉(みつまた)の鉾(ほこ)――シヴァ神の象徴的な持ち物
たぶさ――頭頂に集めて束(たば)ねられた髪の毛のことでシヴァ神の髪型

僧院(マト)の兄弟たちはみな、断食をしていた。現在この家には、ナレンドラ、ラカール、ニランジャン、シャラト、シャシー、カーリー、バブラーム、ターラク、ハリシュ、シンティのゴパール、サーラダ、校長がいる。ヨーギンとラトゥはブリンダーヴァンに行っている。この二人はまだ、この僧院(マト)を見ていない。

今日は月曜日、シヴァ・ラートリー、一八八七年二月二十一日。次の土曜日には、シャラト、カーリー、ニランジャン、サーラダたちが大聖ジャガンナータにお詣りするため、プリーに行くことになっている。

シャシーは日夜、タクールにお仕えしている。（訳註――聖ラーマクリシュナの舎利が銅製の容器に納められて、タクールが生きている時と同じように礼拝供養が行われていた）

ご供養が終わった。こんどはシャラトがタンプーラ（伴奏用弦楽器）を手にして、シヴァの歌をうたった。

シヴァ　シャンカラ　ボ、ボ、ボン
カイラスの主、王の中の王
シヴァの太鼓で
奏でるケヤルが響く
首には蛇の首輪（マーラー）
大きな目は赤くなり
頭は美しい三日月が似合う

ケヤル――古典の歌の一つ

ナレンドラが今しがた、カルカッタから戻った。まだ沐浴をすませていない。カーリーがナレンドラに聞いた――「裁判はどんな具合でした？」

ナレンドラはムッとして――「そんなこと、君たちに何の関係もないことだろう？」

ナレンドラは煙草を吸いながら、校長たちと話をした。

「女と金を捨てなくては、どうしようもないですね。女は地獄の入口です。どれ程多くの、いやほとんどの男たちが女の人の支配下にあることか――。シヴァとクリシュナは話がちがいますけれどね。シヴァはシャクティ(妻)を自分の召使いにしてしまわれた。聖クリシュナは、たしかに家庭にいて世間の生活をなさったが、しかし、徹底して無執着でしたね！　実にあっさりとブリンダーヴァンでの生活を捨てましたものねえ！」

ラカール「それに、ドゥワラカも！」(訳註、ドゥワラカ――クリシュナが王位についていた国)

ナレンドラはガンガーで沐浴をすませ、僧院(マト)へ戻ってきた。自分のぬれた服とタオルを手に持っている。サーラダは今まで体中に土をまぶしていたが――入ってきて、ナレンドラに向かってシャスタンガ礼拝(プラナーム)をした。彼もシヴァ・ラートリーの断食をしている。そしてこれからガンガー沐浴に行くところなのだ。ナレンドラはタクールの部屋(聖ラーマクリシュナの舎利を祀ってある礼拝室)に入ってタクールを礼拝し、それからそこへ坐ってしばらくの間、瞑想した。

バヴァナートの話が出る。バヴァナートは結婚して、生計のための仕事をしている。ナレンドラは言う――「あいつらは世俗の虫さ！」

午後になった。シヴァ・ラートリーの供養(まつり)の準備がすすんでいる。ベルの小枝とビルヴァの葉が集められた。護摩(ホーマ)を焚(た)くつもりある。

夕方――。シャシーが先ずタクールの部屋に香を焚き、ついでほかの部屋にも香を持っていった。それぞれ神々の絵の前で礼拝し、信愛(バクティ)の念をこめてその名をとなえた。

シュリー・シュリー・グルデーヴァ（訳註3）　南無（ナモー）！
シュリー・シュリー・カーリカー　南無（ナモー）！
シュリー・シュリー・ジャガンナータ、スバドラー、バララーム　南無（ナモー）！
シュリー・シュリー・チャイタニヤ　南無（ナモー）！
シュリー・シュリー・ラーダー・ヴァッラバ　南無（ナモー）！
シュリー・ニティヤーナンダ、シュリー・アドヴァイタ、シュリー・バクタ（信者）　南無（ナモー）！
シュリー・ゴパーラ、シュリー・シュリー・ヤショーダー　南無（ナモー）！
シュリー・ラーマ、シュリー・ラクシュマナ、シュリー・ヴィシュヴァーミトラ　南無（ナモー）！

シヴァ礼拝（プージャ）は僧院（マト）のベルの木の下で行われることになっている。今は夜の九時、第一回目の礼拝が

（訳註2）シャスタンガ礼拝（プラナーム）――体の八つの箇所＝頭、目、口、胸、へそ、手、膝、足を地につける礼拝。つまり全身を投げだしてする最高の礼拝。

（訳註3）グルデーヴァ――霊性の師（聖ラーマクリシュナ）。カーリカー――カーリー女神の別名。ジャガンナータ――〝世界の主〟の意でヴィシュヌ神＝クリシュナのこと。スバドラー――クリシュナの妹。バララーム――クリシュナの兄。ラーダー・ヴァッラバ――チャイタニヤと同時代にクリシュナ神への信愛（バクティ）を説いたヴァッラバとその妻ラーダーのことか？　ヴィシュヴァーミトラ――『ラーマーヤナ』に登場する聖仙（リシ）。

行われる。十一時半に第二回目の礼拝。夜のあいだに四回に分けて礼拝が行われる。ナレンドラ、ラカール、シャラト、カーリー、シンティのゴパール等、僧院(マト)の兄弟たちは皆、ベルの木の下の席についた。ブパティと校長も来ている。兄弟たちの中の一人が礼拝(プージャ)の指揮をとった。

カーリーがギーターを朗読する。軍勢の有様――サーンキャ・ヨーガ――カルマ・ヨーガ。朗読をしている途中でときどきナレンドラと話し、議論をする。

カーリー「〝私〟こそがすべてなんです。〝私〟が創造し、維持し、破壊するんです」

ナレンドラ「〝私〟が創造するんだって？　ほかの或る一つの力が、私にさせるんだよ！　この、いろんな仕事を――考えることさえも、その御方がおさせになるんだ」

校長は心の中でつぶやいている――タクールはおっしゃった、私は瞑想している、と感じている間は、アディヤシャクティの支配下にあるのだと！　シャクティを認めなければいけないと。

カーリーはしばらくの間だまって考えていた。やがて又、こう言う――「その仕事とか活動とかいうもの、そんなものはみな幻想だよ！　考えというものさえありはしないんで――そんなこと思っただけでも笑いたくなる」

ナレンドラ「〝それは我なり(ソーハム)〟という場合の〝我〟は、ふつう、私、私と言っている私ではないんだよ。心、肉体、こういうものすべてを取り去ったあとになお残っている、その〝私〟、なんだよ」

ギーターの朗読を終えたカーリーは、「平安(シャーンティ)！　平安(シャーンティ)！　平安(シャーンティ)！」と唱えた。

次にナレンドラたち皆は立ち上がり、讃歌をうたい、かつ踊りながらベルの木の周囲を何度も何度もまわる。時どき声を合わせて、「シヴァ・グル！　シヴァ・グル！」と声高にマントラを唱える。暗い夜だ。黒分十四日目なのである。四方が真っ暗闇！　人も動物も、生きとし生けるもの皆、沈黙している。

赤土色の衣を着たこの年若い世捨て人たち、信者たちが声を張り上げて――シヴァ・グル！　シヴァ・グル！　この大真言のひびきは、雷雲のようにとどろいて果てしない大空に昇り、全一なるサッチダーナンダの中に溶け入った。

供養祭は終了した。夜が明け初めようとしている。ナレンドラたちは暁のガンガー沐浴に行った。

朝になった。沐浴をすませた兄弟たちは僧院のタクールの部屋に行ってタクールにごあいさつし、それから、次々と居間に集まってきた。ナレンドラは新しく美しい黄衣をまとっている。その衣装の美しさは、苦行によって築き上げられた彼の顔と体の気高い美しさ――この世のものとも思われぬ神々しいばかりの気品とよく調和して、まるで全体が光り輝いているようだ！　顔つきは力強く、しかも愛情に満ちている！　完全円満なるサッチダーナンダの大海から、人々に智慧と信仰を教えるために人間の姿をとった、一個の泡のようであった。神の化身の活動を助けるために――。皆、彼から目をそらすことが出来なかった。ナレンドラ、この時二十四才。まさに聖チャイタニヤが世を捨てたのと同じ年令であった。

兄弟たちの断食明けの食事にと、前日にバララームが果物や甘いものを届けてきてあった。

ラカールたち、一、二の兄弟と共に、ナレンドラは立ったまま食物を食べはじめる。一口、二口食べると、いかにも嬉しそうに言った――「ドンノ、バララーム、ドンノ、バララーム！（祝福されたバララームよ、祝福されたバララームよ！）」皆、大笑いをする。

ナレンドラが子供のようにふざけ始めた。ラスグッラを一つ口に入れると、一とき、三昧に入ったような格好をして立ちつくした！　まばたきもしないで！　その様子を見て一人の兄弟がいそいで進み出て、彼が倒れないように支えるふりをする。（訳註、ラスグッラ――シロップに浸した丸いケーキのようなとても甘い菓子）

しばらくしてナレンドラは、ラスグッラを口に含んだまま目を開けて言う――「わ た し は……だ、だ い じ ょ う ぶ……だ ョ」皆はどっと笑い出した。（ナレンドラがラーマクリシュナのまねをしたのである）

校長たちにもプラサード（お下がり）のシッディと甘い物が配られた。校長は〝歓喜の市場〟を見ていた。兄弟たちは万歳を叫んだ。（訳註、シッディ――シヴァ神に捧げる飲み物で、気分を高揚させる麻薬性、中毒性の成分を含んでいる）

万歳（ジャイ）、グル、マハーラージ！
万歳（ジャイ）、グル、マハーラージ！